

Erikson 理論による成人の発達課題： 生殖性達成における性差について

丸 島 令 子

【問題と目的】

Erikson (1950, 1963) が提唱した生殖性 (generativity) の概念は、個性性 (自己完結性、創造性) と関係性 (世代間の連関、世話) の生成の理論と行為の理論の二面を含む複雑なものである。心理・社会的発達課題としての生殖性の実証的研究は、McAdams & de St. Aubin (1992) による生殖性関心尺度 (Loyola Generativity Scale: LGS) や生殖性行動尺度 (Generativity Behavior Checklist: GBC) の開発によるものがみられた。本研究は、概念枠組を McAdams らに依拠しながらも新たに作成した生殖性 (関心=LGS、行動=GBC) 尺度の日本語版によりわが国の成人に対して行った調査結果のうち、今回はその性差について報告する。

【方法】

分析対象者：996名の成人男女 (M/358、F/638、平均年齢：54.48歳、範囲：25～75歳)。調査期間：1999年10月から2000年2月。質問紙：生殖性 (関心、行動) 尺度日本語版 (LGSは17項目、4件法、1～4点、GBCは23項目、3件法、0～2点、ともに、世話、創造性、世代性、の3因子からなる)。他に「Big Five 性格特性尺度」「ベック抑うつ性尺度」を用いた。

【結果及び考察】

LGS と GBC の各3因子 (世話：世話行為、創造性：創造性行為、世代性：世代性行為) とは男性、女性とも有意な相関関係がみられた。このことは、男

女とも生殖性関心は行動に移行される可能性を示唆している。主な結果として、「世話」の関心は男性のほうが女性より低かったが、「世話行為」では女性のほうが男性よりも低かった。このことは、男性は女性より世話の関心は低い、女性よりも世話行為をしていることを表わしている。また「創造性」「世代性」の関心は男性のほうが女性より高かったが、「創造性行為」「世代性行為」では女性のほうが男性よりも高かった。このことは、男性は女性と比べると、自己実現や次世代のための貢献、死後の遺産などの関心は高いが、実際の行動は少ないことを示している。こうした男女の差はジェンダー・スキーマによるものと考えられる。すなわち、ジェンダー・スキーマにより男性は「世話行為」を行い、女性は「世代性行為」を行っている可能性がある。ただし、関心と行動に相関がみられたことから、関心が低い場合はそのようなスキーマが働かない可能性も考えられる。その他、性格特性と生殖性との関連性も検討したが、男女間に相違がみられた。また生殖性はパーソナリティの理解のためにも重要な概念であることが示唆された。

附記：本稿は、2000年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成により、日本発達心理学会第12回大会（2001年3月27日～29日）にて行った研究発表の要旨である。